

タイトル『おばけのばあちゃんと熱おくり』

元にした作品のタイトル…お盆の民間伝承（迎え盆／送り盆）

著者名…小石 創樹（こいわ もとき）

あらすじ…小学生の健生の家では、七月の新盆の頃、おばけ界から亡き祖母が帰省する。おばけの里帰りは、地上の熱をおばけ界に送り、秋を招く『熱おくり』を兼ねているという。歓待ムードの父母をよそに、続く猛暑や夏休みの宿題に追われる健生は、新盆から旧盆までの一ヵ月、家に居座る祖母を内心疎んじていた。

本文文字数…4944文字（空白を含めず）

僕の家では、七月のお盆が来ると、おばけ界からばあちゃんが帰省して来る。

「あれ、健ちゃん。また大きくなって！」

この出会い頭のあいさつがばあちゃんのお決まりだ。仏間の天井から現れ、お供えのキュウリ馬を降りるなり、しわしわの目をもっとしわしわにして僕に言う。バナナボートくらいあつたおばけキュウリが、(でかいって意味ね)ばあちゃんが降りたとたん、片手に収まるサイズに縮み、割り箸の足をトコトコ動かして仏壇に帰って行くのは、いつ見てもシユールな光景だ。

「やっぱり男の子やねえ。あんまり高うて、ばあちゃん届かんわ」

届かんわと言いながら、キュウリよりでこぼこに筋張った手をかざし、背比べしようとする。育ち盛りの小学生なんだから、伸びるのは当たり前でしょ。と思うけど、何年経っても変わらないばあちゃんには、毎年新鮮にびっくりらしい。

「お帰りなさい、お義母さん。今年もゆっくりしてらして下さい」

「相変わらずせっかちな。いい年なんだから無理するなよ」

「あんたも人の事言われんかろ。四十過ぎたら初老やがいね」

「いや、還暦五年過ぎの母さんに言われても」

父さんと母さんのセリフも、ばあちゃんの返事も大体同じで、父さんの年のところだけ時々変わる。永遠の六五歳と、一年更新の四十歳。父さんが七十歳くらいまで元気なら、いずれ追いついて、追い抜いてく日も来るんだろうな。自分の遺影と位牌も飾られた仏壇に手を合わせ、ナンマンダブを唱えるばあちゃん達を、僕は微妙な温度差を感じつつ敷居の外から見ていた。

ばあちゃんは僕が生まれる前に死んじゃったけど、おばけ界の取り決めで、お盆はこっちに帰っていい事になってるらしい。人数制限とか波長とかもろもろの関係で、大勢いるご先祖様の内、毎年来るのはばあちゃん一人だった。

お盆は普通八月じゃないの？ 母さんに聞いたら、うちは新盆だから七月でいいんだって。

八月はおばけ界も帰省ラッシュで、おばけが通るおばけ高速が、キュウリ馬とナス牛で渋滞する。特に行きのキュウリ馬はスピードが出るから、たまに事故も起きるし、新盆の方が空いて安全だって。それではばあちゃんは新盆の七月にキュウリ馬で帰って、八月の旧盆にナス牛でおばけ界へ戻る。合計一カ月、大人にしては長い夏休みだ。

「健ちゃん、後ではあちゃんとゲームせんまいけ。去年見てもろた、スマホゲーム。ばあちゃんもこないだ越して来た、近所の子に教えてもろたがやぜ」

「ごめん、僕宿題あるから」

みんなの話は続いてたけど、僕はリビングを出て、冷蔵庫のアイスを取って子供部屋に行っ

た。  
帰省の度にはあちゃんから聞かされ、おばけ界の事は色々知ってる。向こうにも季節やカレンダーがあり、お役所とかご近所付き合いとかもあって、こっちの世界と大差ない。つまり、もし僕が今すぐおばけ界に行ったら、妖怪アニメの歌みたいに、学校も夏休みの宿題もなく

なったりしないって事だ。

感染症対策の休校で授業が遅れる年が続き、夏休みが十日短くなったのは一昨年の話。宿題が山盛り出され、リモートの補習が増え、やがて緊急事態宣言が解除されると登校日が復活した。分類が変わって外食や旅行もしやすくなり、日常に戻ったと大人は言うけど、去年も今年も夏休みは短縮のままだった。

ゲームなんてやってる暇あるもんか。第一、おぼけのばあちゃんはゲーム機に触れないから、僕のプレイを横で見てるだけじゃないか。帰省や会話はできても、飲食や接触はダメ。それがおぼけ界の分類なんですよ。

ばあちゃんも僕も同じ一カ月の夏休みなのに、片方は宿題づいで、片方はヒマそうにぶらぶらしてる。来るのが新盆なら戻るのも新盆でいいのに、都合良いところだけ利用するなんてズルいと思う。

だから僕は、ばあちゃんの帰省が正直嫌いだ。

八月二週目の登校日、必死こいて仕上げた宿題を持って学校へ行く。ドリルや読書感想文、図画工作は締め切りが早い。最終日一括じゃないのも去年からだったりする。ランドセルは重いし、外は暑いし、朝っぱらからセミはうるさいし嫌になる。

「よう健生（けんせい）。まだ生きてたんか」

あーあ、朝っぱらからセミよりうるさいやつが来た。

「おはよう将己（まさき）。今日も暑いね」

「お前んちは涼しいだろ。おぼけがよみがえって来てんだからさ」

そこまで変わりやしない。あと、よみがえりじゃなくて里帰りだよ。両手がおぼけの将己を無視して席に着く。

将己の家も、クラスの他のみんなも、多分おぼけの帰省はないんだろう。自粛期間以降、そういう家も増えたみたいだ。これも時代の流れてやつ？ だからって、別にうちが悪い事してるわけじゃないのに、僕一人だけおかしいみたいでモヤモヤする。

「どうせなら、お前もあっち行っておぼけになれば？」

反応しない僕にじれたのか、将己は悪態を吐いて自分の席へ戻って行った。

わざわざ食ってかかるほどムカつかなかった。腹の中の不満ややりきれなさを代弁してもらったようで、こっそり溜飲を下げてる僕の方が、よっぽど悪いやつに違いないんだから。

登校時以上に汗だくになって帰ると、ばあちゃんと父さんがリビングで天気予報を見てた。明日の最高気温は35、7℃。降水確率は終日0%で風もない。暑過ぎる事以外は絶好の墓参り日和だ。玄関には線香とろうそく、お花の入ったバケツが置いてある。

「それにしても、今年はいらい暑いがやね。猛暑やら酷暑やら、昔はなーん無かったがに。年

寄りにはこたえっちゃ」

「猛暑日の最多記録更新だっけさ。昔と今じゃ、暑さの基準からして違うもんな。自粛緩和でイベントや行事が復活して、ご先祖様も帰省しやすくなっただろうし、お盆の熱おくりを期待したいところだけど」

「世の中どんな便利になっても、お天道様には敵わんし、病気も戦争も無くならんもんやねえ。ネットの『炎上』やったけ。でかいと帰ったら帰ったで、霊夏（れいか）や異常霊象（いじょうれいしょう）や言うて騒ぐがやろ」

父さんの空っぽのコップと、減らないまま汗をかけた麦茶のコップで、小さくなった氷がカランと沈んだ。

これは父さんに聞いた話だけど、おばけ界がお盆の帰省を許可してるのは、熱おくりがあるからだ。

お盆に人間界へ帰省したおばけ達は、お盆明けにおばけ界へ戻る時、夏の暑さをおみやげに持つて行く。液体が蒸発する時、周りから熱をうばう気化熱と似た現象で、正式には霊化熱。一般的には、熱を向こうへおくり渡すから、熱おくりって呼ばれてる。

おばけの熱おくりで人間界は涼しくなり、秋がやってくる。温暖化が進み過ぎた地球は、もう自力じゃ体温調節が難しく、おばけ界の協力が必要なんだ。逆におばけ界は、体温のないおばけ達が増えて寒冷化が加速し、人間界の熱を分けてほしい。要は持ちつ持たれつの関係らしい。

お盆が全世界にあるわけじゃなし、ただのこじつけだよ。小学生の僕が反論しても、適当にごまかされるに決まってる。八月いっぱい猛暑日だらけの画面に肩をすくめ、追加補習のプリントが入ったランドセルを玄関に放った。

本当に熱おくりの効果があるなら、もっと夏は涼しくなってる。おばけの帰省をなくす理由だってないだろう。現に、病気や天災や戦争で毎年人が死んで、おばけもどんどん増えるはずなのに、ちっとも猛暑日は減らないし、地球の夏は長くて熱くなるばかりじゃないか。

「まあその、去年は冬の反動がすごくて、最低気温の記録更新になったから。とは言っても、お互いバランスを取ってやってかないと、どっちの世界も回って行かないわけで……」

難しい話の途中で、父さんがドアの影に立ってる僕に気付いた。

「お帰り健生。登校日お疲れさん」

「この暑いがに、えらかったねえ健ちゃん。顔真っ赤やねか」

設定28℃のエアコンがいつもより寒く感じて、冷えてきたびしょ濡れのTシャツが気持ち悪かった。

「ほら、麦茶おあがり。ばあちゃん飲まれんから」

「要らなご」

こつちを向いたしわしわの顔にそっぽを向いて言うと、僕は入った矢先の玄関を飛び出した。

カンカン照りの公園通りを早歩きしながら、僕の頭はどしゃ降りの夕立みたいに真っ暗だった。

僕は最低の根性悪だ。感染症も宿題も夏の暑さも、何一つばあちゃんのせいじゃないのに。しわしわの笑顔の奥の、悲しそうに曇った目を思い出してしまつて、早歩きはじきにとぼとぼ歩きになった。

じいちゃんを若い内に亡くして、シングルマザーだったばあちゃんは、ものすごく苦労して父さんを育てたんだつて。父さんと母さんが結婚して、孫の僕の誕生も心から楽しみにしてたのに、僕が母さんのお腹から出る前に、病気で死んじゃったんだつて。

だから父さんは、僕に『健生』と名付けたんだつて。働き過ぎて身体を壊したばあちゃんの分まで、僕が健康で長生きできるように。父さんにいっぱい話を聞いて、ちゃんと知ってたはずなのに。

なんで僕は、ばあちゃんの帰省を素直に喜べないんだろう。もう何日かでおばけ界に戻るばあちゃんに、なんで優しくできないんだろう。家族が大好きで、会いたくて、年に一カ月の夏休みを待ちきれないように帰つて来たばあちゃんに、なんで笑つて『お帰り』を言つてあげられなかったんだろう。

頭の中でさつき投げ付けた『要らない』がわんわん響いて、目の前まで真っ暗にゆがんできた。足がふらついて、転んだら起き上がれなくなった。

「……ばあちゃん、ごめん。ごめんなさい」

カラカラの舌でつぶやいた時、ふつとおでこの辺りが涼しくなった。

あんなに暑かったのに、空気がひんやり気持ち良い。カサカサした、固くて冷たい手に触つたところで、完全に意識がなくなった。

気が付いたのは病院のベッドの上で、僕の腕は点滴チューブに繋がれてた。

熱中症で救急搬送されたんだつて、涙目の母さんが教えてくれた。身体を冷やすのがもう何分か遅れたら、危なかったかもしれないつて。

「ばあちゃんは？」

「うん。ちよつと早いけど、向こうに戻つたよ。健生によろしくつて」

父さんは、それ以上何も言わなかった。

退院後、キッチンのゴミ箱にこっそり捨てられた、しおれたナス牛を見て、僕も何も聞けなくなつた。

お盆が終わつて、暑かった夏も終わつて短い秋が来て。冬になって春になって、また七月の新盆が来て、ばあちゃんは帰省しなかった。次の年もばあちゃんの顔を見ないまま、カレンダーだけがくるくる回つた。

帰省はできても接触は禁止。熱中症の僕を熱おくりで冷やすために、ばあちゃんはおばけ界の取り決めに破ったんだ。お通夜みたいに無口な小学生最後のお盆が終わり、僕はついに悟った。

この先何度お盆が来ても、ばあちゃんは二度と帰って来ない。分類を守らなかつたおばけがどうなるか知らないけど、おばけ界でも事故が起きるし、きつと病氣も戦争も死もあるんだ。おばけが死んだらどうなるんだろう——ふと考えて、これ以上はあんまり過ぎて考えるのをやめた。

会話の中からもばあちゃんが消えてしまった三年目の春、僕は中学生になった。

文字通りうだるような昼下がり、気の早い蝉しぐれを窓越しに聞きながら、僕は病院にいた。産婦人科の新生児室で迎える面会日。ベビーベッドで眠る赤ちゃんの、まだしわの残るふやふや顔に少し笑う。みように年寄りくさく見えるねって言ったら、父さんと母さんのゲンコツをお見舞いされそうだ。

消毒を済ませた手で、ぶくぶく柔らかいこぶしをつつく。この手がカサカサに固くなるまで、元気で長生きするんだよ。きもち不謹慎かもしれない願いを込めて、ぎゅゅと閉じた短い指を撫でた。

「分娩室でね、もう全身熱くて苦しくて、息も止まりそうだった。でも、この子が生まれる瞬間、急に秋風が吹いたみたいに涼しくて、一気にすうっと楽になったの。お腹の中から熱を取って、母さんを助けてくれたんだわ」

母さんのたつての希望で『涼風(すずか)』と名付けられた妹に、三年越しのあいさつを返す。

「お帰り、涼ちゃん」

本気で信じてるかとか聞かれれば、よく分からない。この子が生まれ変わっても、そうでなくても、僕達の家族には違いがないから。今度こそ笑って『お帰り』を言いたかったんだ。

新盆初日、35、1℃快晴。今年も猛暑日記録を更新しそうな、暑くて長い夏が始まったばかりだった。